

忘れられた叡智を求めて

第24回

「ずれ、この人生には、終わりがやってくる。」

どれほどの長寿を得ても、いずれ、終わりがやってくる。されば、その人生の最期の一瞬、我々は、何を思い、何を考えるのか。

この問いに対して、何人かの先人が、示唆に富む言葉を残している。

精神科の臨床医として数多くの人々の死を看取り、その記録、『死ぬ瞬間』(Death and Dying)という書によって、終末医療の思想に深い影響を与えたエリザベス・キューブラー・ロス。

彼女は、その「死ぬ瞬間」を、一つの象徴的な言葉で表している。

Death : The Final Stage of Growth

人生の最期の一瞬

すなわち、「死とは人間の成長の最後の段階である」との思想。

それは、人間成長というものを人生の基軸に置く我々日本人にとって、深い共感を覚える思想であろう。

では、我々は、この最後の成長の段階を、自身の死の瞬間を、いかなる心境で迎えるのか。

スウェーデンの海洋学者、オットー・ペテルソンは、九三歳で亡くなる直前、やはり海洋学者であった息子に、次の言葉を残している。

死に臨んだとき
私の最期の瞬間を
支えてくれるものは
この先に何があるかとの
限らない好奇心だろう。



田坂広志

[多摩大学大学院教授
シンクタンク・ソフィア
バンク代表]

この言葉を読むとき、死の彼方さえも、純粹な好奇心をもって見つめたペテルソンに、我々は、静かな驚きとともに、深い敬意を覚える。

そして、同様の思いを、チベット仏教の最高指導者、ダライラマ一四世も、彼らしいユーモアを交え、語っている。

私は輪廻転生を信じる。
それゆえ、私は
死ぬ瞬間が
楽しみでならない。

どの言葉も、死というものを深く考えさせるものであり、また、我々が生の最期に臨むとき、静かな勇気を与えてくれる言葉であろう。

しかし、その思いと同時に、なぜか、まったく逆の思いが、ふと、心に浮かんでくる。

自我というものを
与えられ
多くの喜びとともに
多くの悲しみを味わった
この生が
最後に
無に帰していくことの
安らぎ。

その思いもまた、我々の最期の一瞬を支えてくれるのではないか。

多くの人々の救済の道を全身全霊で歩んだ、ある宗教家が、その臨終に際して語った言葉がある。

それでは
休ませて頂きます。

なぜか、この言葉が心に染み入る。